

特集

フォーエバー! ライブハウス



1971年、世田谷区烏山にオープンした「烏山ロフト」が日本のライブハウスの始まりだと言われています。以来50年近くにわたり日本のミュージック・カルチャーの土台を支えてきたのが全国に広がるライブハウスです。現在活躍するスーパースターと呼ばれる多くのアーティストたちもライブハウスのステージが出发点でした。音楽ファンであれば、ライブハウスでの大切な思い出があるのでは?! 音楽の街・世田谷には数多くのライブハウスがあり、日々新たな音楽を生み続けてきました。しかし、新型コロナウイルス感染症の広がりでライブコンサートは中止となり、多くのライブハウスが活動もままならず、かつてない危機に瀕しています。そこで、世田谷区内のライブハウス店長さんにライブハウスの現状、今後の活動、さらにはライブ文化の未来・展望についてお話しいただきました。がんばれ、ライブハウス! ライブハウスよ、永遠なれ!

座談会 日時: 2020年7月3日 場所: 三軒茶屋 GRAPEFRUIT MOON

4月以降はお客さんを入れたライブはできなかった

大塚: ロフトは、2月までは通常のライブを淡々とやっていました。最初にコロナに関連してキャンセルしたのは3月頭位です。

原口: そんな感じですよ。

河邊: うちも2月の27日まで普通にやっていた。中止になったのは、2月28日の金曜日だったと思います。3月からは、いわゆる自主企画のものは全部なくなりましたね。それでも当時は4月位には感染が収まると思っていたので、すぐに再開できるように、3月のイベントを4月中旬とか後半にスケジュールをずらしていったんです。それがどんどん後に移動して行って、結局中止

になってしまいました。

大塚: イベント案件*とか500人入る公演とか、関わる人が多い公演からどんどん「これはちょっとできないな」となっていて、シェルターやフラワーズといった小振りなお店は3月中旬までなんとかやっていた。それが3月20日位から、僕たち自身を含め、周りの空気が変わった感じがしましたね、なんとなく。3月22日に格闘技イベントがあったんですが、すごく批判が起こったりもして。

原口: あと、多分影響が大きかったのは、志村けんさんが亡く

出席者



下北沢ろくでもない夜
店長 原口雄介

伝説のライブハウス「下北沢根裏」のかつてのスタッフが「聖地」を残そうと集結。2015年5月から「下北沢ろくでもない夜」と名前を変え、たくさんの音楽と笑顔と感動を発信しています。
<https://www.69demonai46.com/>



三軒茶屋 GRAPEFRUIT MOON
店長 河邊健吾

ライブカフェ&バーというスタンスながら、弾き語りやアコースティックライブはもちろんだら、ロックやソウル、ジャズのライブも行われるオールジャンルなライブハウス。
<http://www.grapefruit-moon.com/>



ロフトプロジェクト
音楽部統括部長 大塚智昭

新宿 LOFT / LOFT HEAVEN / 下北沢 SHELTER / Flowers Loft の全店管理、LOFT RECORDS プロデューサー、音楽フェスの制作、シンガーソングライター SION のエージェントを担当。
<http://www.loft-prj.co.jp/>

なったこと。発表が3月30日あって、みんながビリピリとした感じがありましたね。

河邊: そうですね、そこが結構ターニングポイントでした。



原口: 4月はもう全くダメです。全然営業したような感じではない営業というか。

河邊: 4月の7日に非常事態宣言が出された。

原口: それからもうライブはなくなってしまいました。今は無観客で配信ライブをやっています。

配信ライブはいろんな可能性がある

大塚: ロフトでは、ロフトプラスワン*で文化人や芸人さんが趣味の話をして、ご飯食べながらそれを聞くプログラムがあって、そのまま配信番組にしやすいですね。それで、すぐ配信をやるということになりました。2011年の3.11震災の時にUstreamで被災地に向けて無料配信をやっていたので、その時の機材もあつたりして、4月上旬から始めることができたんです。今後、収益を上げるのは配信だろうと考え、その他の機材も揃えました。

河邊: うち個人経営なので、正直なかなかそこまで手が回らなかった。4月の決まっていたイベントを全部ばらしていく作業に追われてしまって、ただ後始末をしている状態でした。5月に入って、これはもう配信ライブをするしかないと思ったんですが、ただ何を揃えたらいいのか分からなかった。もう調べまくりました。やっと5月の中旬くらいに機材が用意できて、そこから速攻で始めて、今やっとという感じですね。

大塚: 振り返って思い出すと、4月に配信ライブをやるうとしてもミュージシャンが出てくれなかった。そもそも家から出なかったし、バンド自体がリハーサルすらやってなかったですね。

河邊: しかも東京都の自粛協力金の条件に配信ライブがひっかかっちゃった。配信ライブをやったら協力金をいただけないという

話だった。それが5月に入って、配信ライブはOKと変更になった。

原口: うちも配信ライブをやっていますけど、難しい問題がある。実はうちも配信してもお金にならないんです。YouTubeのルールで、登録者数が1,000人ないとダメだとか、4,000時間以上見てもらわないといけないとか。そこをクリアしないと収益化ができないんですね。

大塚: 配信については、うちも含めみんな勉強し始めたところでもうね。今はみんなが「よーいドン」で配信について勉強している段階だと思います。

原口: 今後はガイドラインを守って、お客さんをちょこっと入れながら、配信もするみたいな流れになってくると思いますね。

大塚: そうですね。いつになるか分からないですけど、キャバの半分以上スタンディングで入れられるようになって、同時に配信すれば、今までよりも収益が上がる可能性もあるかもしれない。

原口: いい意味で言うと、配信ライブは地方の人が東京のライブハウスに行かなくても、気になるアーティストを見られるのがすごくいいと思う。東京のバンドが全国で見られるし、地方のバンドも全国で見られる、そういう可能性も出てきますよね。

河邊: 知名度があるアーティストはキャバを飛び越して、例えばここでやってもお客さんは100人しか入らないけど、配信ライブなら1,000人でも見えてもらえる。だけど、生でワイワイ盛り上がりつつの飲食の売り上げがないと、知名度のない若手のブッキングは厳しくなってきましたよね。アーティストを育てるといって僕らライブハウスが担ってきた役割に反することになってしまふ。だからこそ、僕はカメラだったり、ライブストリーミング用ソフトだったりを一から勉強して、自分で配信できるようにしました。外部のスタッフさんに依頼すると予算的な問題が出て、出し物が限定されてしまふ。それだけはしたくなかったんです。通常のライブが戻ってきたら配信はやめるとかじゃない。





ライブと配信を両輪でやっていければ、収益も上げていけるのかもしれない。2021年に、今までの赤字分を取り返せるものになったらベストだと考えています。

大塚：そうですね。両輪になると思います。

河邊：まだ会社にも行けない、外に出られないという方とかもいらっしゃると思います。今、僕らがやっている配信のクオリティもどんどん上がっていていますから、配信ライブをぜひ一度楽しんでみてください。

ゴールが見えないトンネルの中を全力で走っている

大塚：ロフトは7月から少しづつお客さんを入れたライブを始めています。

原口：ろくでもない夜も6月20日くらいから再開しました。

河邊：GRAPEFRUIT MOONも今週末(7月4日)から始める予定です。正直なところ、お客さんを入れないとちょっとお店が厳しいですね。本当にこのままの状況が続いたら、来年には廃業すると思います。

原口：8月のスケジュールが全部埋まっているお店はないと思うんですよ、もうポコポコ空いている。9月も同じようなものです。通常は大体3か月先まではスケジュールが埋まっている。今はそんなお店はどこにもないんじゃないかな。

大塚：正直今の時点で8月はどうなるのか、9月がどうなるのかは分からない。「8月からやっていいよ」と言われても、8月からブッキングできるものでもないですし、お客さんも集められないです。じゃあ、今年の年末だったら通常営業できるのかって、結局は分からない。ただがんばるだけ。ゴールが見えないトンネルの中を全力で走っている、そんな感じです。

原口：今回のコロナ感染を別にしても、ライブハウスって、なんか怖いイメージがあるじゃないですか。暗くて、煙草臭くてみたいな。でもそういうお店はだんだん減ってきたと思いますよ。全

然怖くないで、ライブハウス未経験者の方にもぜひ一度来ていただきたいです。お店に入って、もし怖いと思ったらスタッフに話しかけてくれれば、お相手しますから。一人ぼっちでも寂しくないです、はい！(笑)

大塚：ロフトは元々ロックカフェ、ロック喫茶から始まったので、下北沢のフラワーズもバー営業を常にやっています。音楽だけでなく、お茶やお酒、ご飯とか他の飲食店にも負けなくらいがんばっているんで。ぜひライブ目的以外でも来てくれたらいいなあと思います。

河邊：うちもレストラン営業しています。食事には力を入れているんで、それを楽しんでもらいたいと思います。

原口：はい、うちもチケット代なしでパースペースに入れます(笑)

河邊：本当にライブハウスは全然怖いところじゃない。今回コロナ騒動でライブハウスは危ないところで行くべきじゃないって逆風が吹いてしまって、悲しいことだったんですけど。どのお店も全然クローズ感ではないです。誰でも気軽に入ってきてもらって、より多くの人にアーティストを観てもらって、新しい出会いを提供する、それがライブハウスの仕事だと思っています。

大塚 原口：そうですね。



* イベント案件…外部の制作者によるコンサート・イベントなど。

* ロフトプラスワン…様々なジャンルの知識、経験をもった人を「一日店長」として招き、独りで、もしくはMC、ゲストを交えて、テーマを決めて話をするトークライブハウス。

撮影：KAZNIKI